



筑紫女学園大学リポジト

Advice for Educational Counseling Teacher

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-05-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 板井, 修一, ITAI, Syuichi メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/310

教育相談に関わる教師へのアドバイス

板 井 修 一

Advice for Educational Counseling Teacher

Syuichi ITAI

はじめに

1990年代にバブル経済が崩壊し始めた頃から、物質的な豊かさよりも心の豊かさの方に、人々の関心が向くようになった。またその頃は、全国的に不登校の子どもの増加が注目されていたが、いじめ自殺が立て続けに発生したことも加わり、子どもの心のケアに対する社会的関心が高まっていた。ところが、こうした問題は、学校という枠組みのなかだけで対処できるほど単純なものではなく、その発生には、家族関係の問題や、経済的不安、地域社会の結びつきの希薄化など、様々な要因が複雑に関係している。学校だけの対応や、これまでの教師の側からの子ども理解や対応技術では、問題の解決が困難な場合が多くなってきた。教師とは異なった立場から、新しい視点や援助技術を持った専門職の力を、学校現場に導入することが必要になってきた。

こうしたことから、学校における教育相談活動の充実を図る目的で、スクールカウンセラー制度が「スクールカウンセラー活用調査研究」として、平成7年度から試行的に開始した。その後、平成19年度からは、全国のすべての公立中学校に、スクールカウンセラー（以下SCと表記）が配置されることとなった。さらに平成20年度からは、スクールソーシャルワーカー（以下SWと表記）の配置も進められ、子どもと子どもを取り巻く環境に働きかけ、学校と家庭、地域との橋渡しを行うなどにより、悩みを抱えている子どもの問題の解決に向けた働きかけも始まった。

平成20年11月に公表された「平成19年度児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」(文部科学省初等中等局児童生徒課調べ)の調査結果からは、現代の子どもたちが抱える問題の広がりや深さが見えて来る。注目すべき特徴として、以下の項目を挙げることができるだろう。

- ①小・中学校における不登校児童生徒数は約12万9千人（2年連続の増加傾向）
- ②小・中・高等学校における暴力行為の発生件数は約5万3千件（すべての学校種で過去最高

件数)

- ③小・中・高・特別支援学校におけるいじめの認知件数は約10万1千件（前年度より約2万4千件減少しているが、依然として相当数に上る）
- ④いじめ態様のなかに含まれる「パソコンや携帯電話等で誹謗中傷や嫌なことをされる」というもの約6千件。

学校における教育相談活動の充実に向けた制度は整えられつつあるが、子どもたちの心の問題は一向に解消することなく、さらに複雑多様化し困難化してきているようにある。子どもたちの心の問題は、深刻で憂慮すべき状況にあり、学校における教育相談活動は、今後さらに一層充実することが求められている。

SCやSWといった外部の専門職による活動は、今後も一定の役割を果たしていくことが期待されている。しかし、学校現場における教育相談活動の主たる担い手は学校教師であり、その果たす役割が、外部のSCやSWにとって替わられるものではない。日常的に子どもと接し、保護者とも緊密な関係を作り上げているのは教師において他にない。教師が教師としての役割を担いながら、教育相談能力を高めていくことは、今後も求められていく課題であることに違いない。

こうしたこともあり、SCに期待されている役割の一つは、その外部性と専門性を活かした、学校教師の行う教育相談活動に対するコンサルテーション機能が挙げられる。それは、カウンセリングの専門家に対する指導とは違い、学校教師として特性を活かしながら、教育相談活動をより効果あるものにするための助言である。難しい臨床心理学の理論や技法を習得させることを目的としたものではなく、むしろ子どもと子どもの抱えている問題を見るとき、新しい視点や発想を伝えていこうとするものであり、どのような関わりが有効かについて、教師にとってわかりやすい言葉で助言することである。

この小論は、平成11年度からSCとして約10年間、学校現場での子どもの心の問題について、教師と協働しながら活動してきた筆者の経験から、教師が教育相談活動を行うときに、心にとめておくと役に立つであろうことをまとめたものである。

1 教師へのコンサルテーションの必要性

SCとしての子どもの心の問題と関わっていると、長期にわたり不登校状態が続き、生徒と直接カウンセリングを行うということができないケースに出会うことは多い。そうした場合、家庭訪問という形で生徒と関係を作り上げていくことを試みることもある。しかし、多大な労力と時間が必要となるし、SCの家庭訪問を受け容れてくれない子どももいる。

こうしたケースについては、関係の結べる保護者との面談を中心に援助を行うことになる。SCの勤務時間に保護者が来談することができれば良いのだが、場合によっては保護者の仕事の都合に合わせて、夜間の時間帯に面接時間を設定せざるを得ないこともある。定例的なカウンセリングは難しく、SCによる面接援助にはこだわらず、別のアプローチを考える必要性がある。

生徒や保護者と日常的に接することができるのは、生徒のクラス担任や教育相談担当の教員である。学校教師が中心となり長期的に安定した関係に基づいた援助が行える体制を作っていくことが必要である。教師が責任感からや、情熱だけをたよりに、生徒や保護者にアプローチしむしろ、問題をこじらせてしまうことも起きている。

教師の役割を活用しながら、問題と適切に関わって貰うために、SCによる教師に対するコンサルテーションの果たす役割は大きい。生徒の問題について、生徒指導委員会や不登校対策委員会といった委員会組織のなかで、専門的な立場から生徒の問題について、その理解の仕方や対処方法等について説明することで、好ましくない対応に陥ることを防止したり、試みてみると役にたつ援助プランについてお願いしたりすることは意味のあることである。

こうしたコンサルテーションをとおして、教師の側には、専門家からのサポートにより、自信をもって生徒や保護者と関われる安心感が生まれてくる。また、こうした指導を受けながらの援助活動により効果が現れてくると、教師としての自信を取り戻してくる。コンサルテーションは、教師の教育相談活動に対する意欲を高めるだけでない効果をもたらしてくれると考えている。

2 教育相談で問題となる教師の課題

生徒の心の問題に、教師と共に取り組んでいると、どの学校においても出会う共通した難しい問題があるように思われる。それぞれの教師は、生徒の問題と懸命に向き合おうとしているのだが、必ずしもうまくいっていないケースに遭遇する。以下に、その典型例を挙げ、そこに潜む問題と課題を検討する。例として提示する問題は、比較的一般的に、どの学校においても見られるものであり、特定の学校の特定の教師を想定したものではないことを、あらかじめ断わっておく。

1) 成果を急ぐ教師

不登校の続いていた生徒が、ようやく登校できるようになったものの、すぐには教室に入ることができず、保健室登校となることがよくある。ようやく学校のなかに居場所を見つけ、学校に馴染んできたのに、「いつまでも保健室にいるのではダメ。教室に入りなさい」と、担任教師が教室復帰を急がせる。教室復帰の糸口になればと、給食時間だけでも教室で過ごすよう、クラスメイトを保健室まで迎えに行かせたりする。生徒がまだ十分に教室復帰の準備ができていないときに、性急に成果を期待した働きかけは、一気に生徒の不安を高め、保健室登校さえもできなくさせ、再び不登校状態に追い込んでしまうことになる。

生徒の心理状態を理解しようとせず、問題の解決を一気に図ろうとする担任教師の心の奥に、自分がなんとか解決してやろうという過剰な気負いや責任感がうかがえる。生徒の抱える問題を、生徒と共に考えるという発想や対応に欠けている。問題に対する教師の熱心さが、かえって逆効果となってしまうことになっている。

心の問題の解決が、学年や学期といった学校の時間の流れとは、別の流れで進むものであることを理解しておく必要がある。限られた時間のなかで解決を急ぐあまり、子どもの心の成長変化

のペースと噛み合わなくなってしまう。子どもの問題から少し距離を置きながら、子どものことだけでなく教師が自分自身のことについても、よく把握しながら関わる必要があるのかも知れない。

2) 責任感から問題を抱え込む教師

クラス担任となり受け持った生徒が不登校状態に陥ると、教師は生徒との対応や学級経営がうまくいかなかった結果として、問題が起きたのではないかと考えがちである。適切な対応を取っていれば、深刻な事態に落ち込まずに済んだかも知れないと、心の隅に自責の念を抱き、自信を失っている。

問題の多くは、教師の力量や資質に関わる問題ではない。家庭の問題や友人関係、あるいは思春期にさしかかる生徒自身の心の中に起きる発達課題と結びついた心理的葛藤といったものもあり、過度に自分の責任と結びつけて考える必要のない場合が多い。

過剰に責任を感じ、問題を他者に知られることを警戒し、あたかも何事もないかのように振る舞う教師もいる。ところが、事態が深刻なものとなり、教師自身の中に留めておくことができなくなり、学校全体で取り組みの必要な事態に至ることもある。

ある不登校のケースでは、家庭訪問を繰り返しながら登校を促し、登校が続いたかと思えば散発的に休む日があったりの状態が続いていた。周囲の教師も、この生徒の問題については、担任が家庭訪問や保護者との連携を取りながら、一進一退の経過を辿っていることを承知していて、ことさらその指導援助に口を挟むことはなかった。ところが、事態は好転しないまま、次の学年まで問題を持ち越し、引き続きクラス担任として生徒の問題を抱えることになった。このことは、責任を全うしようとする担任教師としては好都合であったし、他の教師にとっても新たな重荷を引き受けずに済んだことに安心していた。こうして、ケースへの必要な対応が講じられないまま、教師集団が互いに手をこまねいているなかで、何の進展もないまま時間ばかりが経過していた。

ここには、暗黙のうちに問題の生徒を抱え込み、他の教師と問題を共有することをしないままにしている問題がある。また、周囲の教師も、クラス担任が責任を持って関わっているのだからと、あえて口を挟むことはばかり、遠巻きに問題を見守っているといった状況が生まれている。生徒の問題を抱え込む担任と、あえてやっかいな問題には首を突っこまずにしようとする教師たちの双方に問題がある。

3) 善意と情熱からやり過ぎてしまう教師

担任をしているクラスの生徒が、やむを得ない家庭の事情（親の病気による長期入院）から必要な養育が受けられない状態に陥ってしまった。施設への入所も検討されたが、生徒と弟はこれを強く拒否し激しく抵抗するので、そのまま子どもたちだけで暮らすことになった。ところがやはり、家庭には居場所がなく、深夜営業のスーパーマーケットやコンビニ店を渡り歩き、夜間徘徊を繰り返すこととなった。少年補導の担当者に保護され一時的には落ち着くが、やがては同じ

ことを何度も繰り返すこととなった。施設への入所の計画が進むなか、子どもの意志は入所を頑なに拒否するものであった。こうした生徒のおかれた状況を見かねた担任教師が、子どもたちを自分の家庭に引き取り養育をするということになった。

クラス担任でもあり、かつて生徒が入部していたクラブ活動の顧問でもあったという関係から、生徒の置かれた家庭状況と問題行動の解決になればとの思いから、自宅に引き取ると決心をしたという。教師宅での生活の始まった当初は、生徒もその生活に馴染もうと努力していたようであるが、やがて以前と同じように深夜徘徊が始まり行方がわからなくなることも頻発するようになった。教師は、生徒の問題をもてあますようになり、夜間、勝手に外出しないように厳しく監視し、厳格な態度で対処するようになった。

結果として、生徒の立場からすれば、教師の一人勝手な思いから引き取っておりながら、生徒の思いを理解するよりもおとなしくしていることを要求するばかりで自分たちの気持を理解してもらえないと失望を感じさせることになっていた。生徒はわが子同様であると、担任教師は思っている、境界線を越えた関わりは、時に、生徒の側に過剰な期待を抱かせるとともに失望を刻みつける危険性をはらんでいる。

生徒の問題を、教師が自分のなかで解決を図ろうと、問題を抱え込むことによって、お互いが傷つき合うという結果を招いていた。何とかしてやりたいという切実な思いは、問題解決に向けた原動力となるが、互いの距離を失うことの危険性を忘れてはならないだろう。

4) 自己の経験に固執する教師

自己の経験で成功した関わりを、唯一の解決方法と確信し、他のアプローチの提案を受け容れようとならない教師がいる。コンサルテーションとして臨床心理学立場から、子どもの心理状態や、問題の理解の仕方について説明をしても、現場を知らない者の空論と信用しない。

こうした教師には、経験した成功例について、なぜその方法でうまくいったのか、変化が現れたのはなぜかの分析がないことが多い。成功した一例から、過大に一般化した信念を押し通そうとする。場合によっては、自己の経験に基づく信念を他の教師にも押しつけ、従うことを要求することが起きる。校長や教頭といった学校の責任者が、こうした自分の信念に縛られていると、問題の解決に向けた学校としての柔軟な対応は一層難しいものとなる。

生徒の問題について検討する生徒指導委員会や不登校対策委員会といった校内の会議では、不登校状態が長期にわたり、あらゆる知恵を絞っても万策尽きたケースが、検討課題としてよく取りあげられる。実効ある対応の方針を見つけ出すことができず会議が膠着状態に陥り、会議の参加者が皆、対応に苦慮していると、強い言葉で自分の成功経験から導き出した方法を主張し、この方法しかないと譲らない教師が現れることがある。たまたま家庭訪問から学校に連れ出し、再登校に結びつけることのできた経験から、強引にでも引っ張り出すことが最善策と主張する。行き詰まりを感じているところに「この方法しかない」との発言は、十分に検討されることがないままに会議の方針として決定されることになる。

5) 無力感から問題を専門家に丸投げしてしまう教師

不登校のケースには、これまでに様々な関わりを試みたが、いまでは殆ど放置された状態ということができるようなケースがある。そのケースのことについて触れれば、十分な対応ができていないことがよくわかっているから、誰も改めてこのケースについて触れようとしなない。経過観察とか、見守るといった言葉で、当面の直接的な関わりを控えているケースがある。

こうしたケースの担任は、解決を急ぎたいがどうにもならなかったという無力感を強く感じている。大物ケースとして、心のどこかにいつも引っかかっているために、教育相談にSCが関わり始めると、SCの力量を図る意図もあって、こうしたケースが担任教師からSCに丸投げされることがある。SCが関わっても問題が解決に向かわないことは、教師が感じていた無力感の弁解になる。専門家であるSCでも無理なのだからと納得をする。

ここには、問題に対して程よい距離がとれず、問題から目をそらし関わりを持とうとしない教師の姿が見える。生徒の問題について、忘れたい、関係ないと思いたいが、心のどこかにいつも引っかかっていることになる。

ここに挙げた教師の問題には、共通した特徴を見ることができる。子どもの問題に対し、過剰に抱え込んだり、突き放したりといった、子どもの問題との距離の取り方の偏りである。どのような問題においても見られることであるが、問題がうまく処理できなくなっているときには、柔軟さが失われ硬直した対応になっている。生徒の問題に向き合うとき、その問題に対し、教師が状況に応じてある時は集中的に、また別の時にはゆっくりと見守るといった柔軟な距離の取り方ができていると、問題がこじれずに済むことが多いのではないかと考えられる。

3 子どもが心を開くとき

1) 信頼関係が心の扉を開ける

教育相談の主たる対象は、当然のこととして、問題を抱えている子ども自身である。しかし、子どもが自分の抱えている問題について、教師に相談を持ちかけてくることは稀なことである。

思春期の子どもは、大人と対立する中で自己を確立していくプロセスの途中にある。教師や学校に対して、実は依存したい気持ちを隠しているのだが、表面的には反発の態度を取りがちである。易々とは、心の内を大人に語ろうとはしない。むしろ、心の中に誰にも明かさな秘密の領域を持つようになることが、大人に近づくことでもある。本当に信頼できるかの確信が持てるまで、心の秘密を明かそうとはしないものである。

子どもは教師をはじめとした大人の言動を、敏感に観察しながら、大人との安全な距離の取り方を図っている。反発するかと思えば、過剰に親しげに接近してきたりもする。すねてみたり甘えたりしながら、大人を確かめている。反発や甘えの裏に、子どもの心のSOSのメッセージが隠されている。言葉で語るよりも、行動で心の不安を表現しているのである。大人に対する不安定で矛盾した態度のなかに、子どもが求めているものが何かを的確に察知する感受性が教師には求

められている。

したがって「何か困っていることがあるでしょ」「何でも聞いてあげるから話なさい」といった直接的な促しだけでは、子どもとの信頼関係を作り出すことは難しい。誰にも語る事がなかった心の内を、ひとりでの喋り始めるのは、子どもが安心感を持つことができるようになったときである。一緒に居ても肩から力が抜け、互いに心の許し合える関係が生まれたときに、「実は」とか「いままで誰にも喋らなかったけど」といった言葉とともに、子どもが意外なほど深くたくさんのかんじ、考え、心を痛めていたか語られる。

2) 子どもとの距離の取り方

「あなたの味方だから」とか「信用して」という思いを語るだけでは、信頼は生まれない。教師からの一方的な接近は、子どもを警戒させるだけである。教師が子どもの心の扉をノックしても、子どもは扉についた小さな覗き穴から、大人のすべてを見ているのである。

教師が他の生徒との関係で見せる言動から、教師の本当の姿を見抜いている。どの生徒に対しても常に変わらない誠実な姿勢は、子どもにはすぐに判る。条件つきで優しくったり厳しかったりする態度は、子どもには信用できない人物と映る。いつでも、誰にでも同じように振る舞うから、安心して子どもの方から接近してきたりもする。教師に甘えたり、ふざけたり、じゃれついてきたりするの、安心感を抱いていることの表れでもある。

教師に対するコンサルテーションにおいて、担任が家庭訪問に出かけるときにも、決して登校刺激をしたりせず、生徒が関心を持っていることを話題に、短い時間でよから話してくるだけでいいとお願いをする。子どもと会える機会が少なく、せつかく会えたからと、欲を出してたくさん関わろうとするのは好ましくない。

ある全く登校できない状態になっている不登校ケースでは、放課後に家庭訪問をして、生徒と一緒に愛犬の散歩に出かけることを繰り返したことがあった。学校のことや、友達のことには触れず、特別なことは喋らないまま、時間をともにすることを繰り返した。また、あるケースでは、テレビゲームを愉しんで帰ってくることもあった。そうした、特別でない時間をともに過ごすことが、安心感を生み出すことに繋がるものと考えている。

問題と向き合わさせるなどという、強引なやりかたは決してしないことである。追えば逃げるのである。子どもの側から、ついてくるような関係が生まれるといいと考えている。

3) 横に並んで同じものを一緒に眺める関係

子どもとの関係を作るとき、横に並ぶ位置関係が、安心した関係を生み出してくれる。カウンセリングにおいて、視線が90度の角度で交わるように座る方が、正面に向き合うよりは緊張しなくて済むことを多くの人が知っている。それと同じように、同じ方向を向いて、横並びに座る位置関係を意識して活用することも役に立つ。

子どもの発達と親がとる子どもとの距離に関する研究(板井, 1991a)によれば、子どもの年

年齢が上がるにつれて、親は子どもに対して正面から向き合う関係よりも、子どもから離れて斜めから子どもを眺めていたり、子どもと横に並ぶ関係が多く見られたことを明らかにしている。

また、看護学生を対象とした高齢者看護における距離の取り方について研究した結果（板井、2001）においても、学年が進み看護実習という現場経験を積んだ学生では、問題場面において、正面から接近しようとするよりも、横に並んで関わる方法を選ぶことが多くなっていた。

子どもの発達に応じて親は、柔軟に接近したり離れたりしながら、互いが安心していられる関係を調節している。関係が近ければ、うまくいくというわけではないことを、子育てのなかで親は気づいているのである。また、高齢者看護における看護学生の距離の取り方の変化は、問題に対し直接的で、正面から対決しようとする姿勢が、必ずしも成功しないことに気づき、問題から距離を置いたり、横から関わったりと、柔軟な対応が必要と気づくようになったことを示している。

横に並び、直接関係のない話に時間をともにする中で生まれる共感的な時間が、かえって問題を和らげてくれたり、アプローチしやすい条件を生み出してくれるようである。横に並び、ともに同じものを眺めながら、心をつにしていける時間は、人間関係における共感性の発達の原点でもあると考えられる。共同注意、あるいは共同注視に関するさまざまな研究は、この共感性の発達について多くのことを示唆してくれる。同じものを共に見ながら、共に同じ感情を共有することが、心を通いあわせる関係の原点なのである。

板井（2005）は、植物というモノを介して、対人援助を行う園芸療法においても、この共同注意の関係が、園芸療法に治療的効果をもたらすことを指摘した。一緒に眺めるのは、作業している手元の草花であったり、遠くの景色かもしれないが、共に同じモノを眺め作業をしていると、クライアントとセラピストは共に「きれいですね」とか「面白いですね」と、同じ感情を抱き互いのところが一つになる場面が生まれて来る。こうしたモノを介した関係は、深く直接クライアントの問題に入り込むことをしなくても、互いに共感的な関係が生まれてくるのである。問題の解決に近づくためには、問題から目を逸らさず向き合うことだけが近道ではない。

4 保護者との関係の持ち方

教育相談において、保護者との面接は重要な役割をもっている。子どもが教師に対して拒否的で、関係を結ぶことが難しいとき、保護者は有力な援助の窓口となる。保護者を通じて生徒の状況を把握したり、生徒への心理的援助を行わなければならない場面は多い。

「将を射んとせばまず馬を射よ」という諺があるように、子どもを動かそうとすれば、保護者を味方につけ援助することが大切なポイントとなる（板井、1991b）。保護者は、子どもの問題について悩み、格闘するなかで、問題解決の自信を失っている。ときに、無力感から子どもの問題に対し無関心になっていたり、逃げようとしていたりする。保護者を援助することで、子どもの問題にアプローチすることは、教育相談においても珍しいことではない。

1) 保護者の心理状態

悩みや困りごとを抱えて来談する多くの人は、そのことに心が占有されてしまっていて、周りが見えなくなってしまう。あるいは、周りを見ようとしなくなってしまう。毎週1回の面接を1年、2年と継続するなか、毎回おなじ相談室を使っているのに、相談室の壁に掛けられている絵や、応接セットの形や色など、いつも目にしていても関わらず、殆どといっているほど記憶に留まっていない。それは相談者にとって決して大事なものではないからという理由からだけでなく、そうした周囲のものに関心が殆ど向けられていないからだろうと考えられる。

相談が進み、やがて来談者のところに落ち着きが生まれて来るころになると、大きな変化が現れる。「ああ、この相談室の窓の向こうには、〇〇山が正面に見えるんですね。いままでも、毎回の面接で見えていたはずだけれど、全く意識していませんでした。今日、ハッと気づいたんです」といった言葉で、その驚きが語られることをよく体験する。

不適応状態に陥り、抱えている問題に心が奪われ、目がそのことに釘付けになっていると、周りや全体が見えなくなってしまうのが人間なのかもしれない。

2) 距離を置いた問題との関わり方

問題と向き合い、問題と格闘しているときは、むしろ全体が見えていない。痛みのあるときに、その痛みのある場所や、そのことに注意を向け続けていると、かえって痛みは強く感じられ、痛みから逃れることができなくなってしまう。痛みとは関係ないことを考えたり、痛みから気を逸らしたりすることが役に立つことは、日常生活の中で私たちが身につけている生きるための知恵である。子どもが転んで膝を擦りむいたときに、「痛い痛い飛んでいけ」とおまじないを唱えてやったり、子どもの手を引いて「面白いものを見に行こうか」と気を逸らしてやると、泣いていた子どもが泣きやみ笑い声をあげることも起きてくる。簡単ではあるが、意外なほどにことは役にたつ方法である。

そう考えると、むしろ問題と直面しない方が良いことがある。問題や課題と対決しない関わり方の方が、功を奏することがある。問題から逃げない生き方は、強いようだが賢くはないのかも知れない。「柳に枝折れなし」の言葉のように、激しい風も受け流すしなやかさが、実は強いところを支えていると考えられる。

相談援助の仕事に従事していると、問題との直面化ということ、相談面接の中でも欠かすことのできない課題としがちである。「問題と向き合ひましょう、問題から逃げずに、問題を自分に課せられた試練と捉えて戦っていきましょう」などと、威勢の良いことを来談者に要求してしまうことがある。相談機関に来談するまでに、すでにもう十分に苦しみ消耗してきた来談者に、鞭打つように「頑張りましょう」と要求することは、カウンセラーの身勝手な押しつけと言っても良いものである。来談者に必要なのは、むしろ、これまでよく頑張ってきたことに対する「ねぎらい」の言葉であり、力を抜いて身を委ねる休養なのかも知れない。もう一人で頑張る必要はないのだと伝えることが大切であると考えられる。

3) 問題を横に置いてみる

抱えている問題と勝負することを避け、問題をひとまず横に置いておくことや、いずれ向き合うことにして、いまは避けて通ることは、本当の問題解決ではないと否定的に捉えられがちである。ところが、問題を正面突破しようなどと、身の程知らずな取り組みは、心身を消耗させるだけで賢い遣り方ではない。問題の解決を、ひとまず棚上げしてみることは有効な方法である。また、「自分が頑張らなくて、誰が子どもの問題を考えてくれるのか」と、問題を一人で抱え込む親は多い。そうではなくて、人に問題を預けてみるのも役に立つ。時間が問題を和らげてくれることもある。果報は寝て待ても真実である。完全な問題の解消などという大きな目標を立てず、問題を多少は残しながらも、折り合いをつけることを目標にすることも、一つの解決のゴールである。

増井（1987）は、患者が自らの症状に困っている時、各自がそれなりの、時には必死の努力を払って、その症状と対処していることを指摘している。その患者の努力の公約数は、それに触れると混乱を引き起こす考えや感じに対し、触れないでおこうとする努力であると述べている。

保護者への援助を行うときに、問題と適切な距離を置いてみるのが、結果として良いものをもたらすことを、教師が提案できるといい。そうすると教育相談の場が、教師から保護者が「親としての努力が足りない」とか「成果が出ていない」といった評価され指導される荷の重い場とならず、子どもとの関わりに自信と希望を取り戻す機会となれるのではないかと考える。

5 結語

この小論は、学校教育相談に関わる教師が、生徒や保護者と対応するときに、知っていたり身につけていたりすると役立つであろうと考えられるポイントについて述べたものである。学校現場においては教科担任として生徒と関わる教師が、臨床心理学やカウンセリングの専門家としての知識や技術を身につけることは難しい。しかし、日常的に生徒の心の問題と直接関わり、対応の機会を最も多く持っているのも教師である。

SCがカウンセリングの専門家として生徒と関わるにしても、多くの場合が週に一回といった割合で、常に子どもの生活の側にいるわけではない。しかし、教師が学校教育相談の主体として活動するときに出会う様々な問題について、SCがコンサルタントとして教師を支える役割を果たすことはできる。SCが臨床心理学の専門家として期待されているのは、その外部性を活かしながら関わるコンサルタント機能ではないかと考える。

非専門家としての教師に、学校教育相談の担い手としての適切な役割を果たして貰うためには、教師自身では気づきにくい部分について、気づきと理解を促すことが必要となる。この小論では、子どもとの距離の取り方や、問題との距離の取り方の視点から、教育相談活動をふり返ってみるものの有効性について論じた。

子どもとの距離を失ってしまうと、子どもの問題を一人で抱え込んだり、性急に成果を求めるあまりに、子どもの心を理解することを忘れてしまうことになっていることについて警戒しなけ

ればならないことを指摘した。また、子どもの問題と関わることに無力感を感じて、SCに問題を丸投げして関わろうとしないことの起きることについても触れた。

問題を解決しなければならないと、正面から向き合い格闘する姿勢は頼もしいが消耗することが多い。むしろ、問題は解決しなければならないなどとは考えず、問題が問題でなくなる方法を考えることが大切である。問題から離れてみることや、問題を受け流すことや、一時棚上げしたり、見て見ぬ振りをするこも、問題の対処方法として有効である。

とかく、人は難しい問題に直面すると、それを異物や障害と受け止めがちである。不快感や違和感をもたらすために、それは排除したり突破しなければならない障害物として捉えられがちである。そのために、人は問題解決の方法を探すことに目を奪われがちである。ところが、その解決策はたやすく見つかるようなものではないために、異物がさらに大きな異物として感じられるようになってしまうのである。

学校教育相談において、教師が問題と向き合うときにも、子どもの問題を異物や障害物として、排除することだけを考えてかえってうまくいかない。それよりも、その問題を子どもが示してきたことの意味についてゆっくりと考えたり、その問題から離れて、子どもと気持ちが通い合うような体験を重ねることで、問題が問題でなくなる時の訪れるのを待つことの方が役に立つと考える。

引用文献

- 板井修一 (1991a). 母親の子供に対する心理的距離の測定 久留米医学会雑誌, 54, 572-589.
- 板井修一 (1991b). 児童思春期におけるカウンセリングの実際 福岡市学校精神保健協議会報告 (第三輯), 180-183.
- 板井修一 (2001). 看護学生の老人に対する心理的距離 筑紫女学園大学紀要, 13, 281-299.
- 板井修一 (2005). 園芸療法と援助関係 現代のエスプリ, 452, 184-191.
- 増井武士 (1987). 症状に対する患者の適切な努力 心理臨床研究, 4 (2), 18-34.

(いたい しゅういち：発達臨床心理学科 教授)